

国立大学法人佐賀大学 令和4年度研究報告書

研究成果（概要）

言語能力の捉えとめざす姿、育成方法を明確化し、それらを基にする教科等の枠組みを超えたアカデミック・ライティングの指導の取組を実施した。

・「言語能力」の捉え・めざす姿・育成方法・更には各学年の到達度目標を3つの側面から明確にしたことで、本校の全教員が「言語能力」について共通認識をもち、同じ尺度の下、各教科等の指導にあたることができたと言える。1・2年次をふまえると、各教科における「言語能力」育成として捉えるだけでなく、教科横断的な視点の明確化とそれを全教師が共通認識し、可視化できる指標があることが上記の成果に大きく影響したと考える。

・各学年の総合的な学習の時間の実践から、「ラーニングマップ」を活用したことで課題解決の過程が可視化され、個人探究を行う「鯨っ子学習」の見通しをもって学ぶことができたと言える。また、個人の学びをラーニングマップに追記したり俯瞰して学びを捉えたりすることで、深いサイクルを生み出すことができた。1・2年次をふまえると、指導モデルやラーニングマップを活用し、課題解決の過程や学びの足跡を可視化することで、教師も児童も各教科等の学びのつながりを共有することが上記の成果に大きく影響したと考える。

1. 研究課題と調査・取組内容

（1）具体的な研究課題

言語能力の捉えとめざす姿、育成方法を明確化し、それらを基にする教科等の枠組みを超えたアカデミック・ライティングの指導の取組を実施し、その効果を検証した。

（2）研究課題に基づいて実施した調査・取組内容

本研究では、主に以下の4点について取組を行った。

- ア) 「言語能力」を統合して解決する場の設定
- イ) アカデミック・ライティング指導の計画と実践
- ウ) 「言語能力」育成状況の多面的測定
- エ) 「言語能力」育成のための指導方法の改善と発信

以上のことを、複数の教科等研究を行っているという附属小学校の強みを活かして行った。一面的な研究ではなく、それぞれの専門性を活かし、大学の教員とも共同しながら多面的、構造的な研究になるよう進めていった。

ア) 「言語能力」を統合して解決する場の設定

1年次では各教科等で大切にしてきた「読解力」「言語能力」の育成方法を用い、その指導方法と指導過程を児童の姿を基に整理し各教科等で育成してきた。また、言語能力を統合して解決する場として「鯨っ子学習」を設定し、アカデミック・ライティング指導を交えて実践を行ってきた。今後も実践を重ね、児童が言語能力を発揮する具体的な場面や育成方法、その基盤づくりについて明らかにしていく。2年次では、各学年教科等での学びと鯨っ子学習との関わりについて可視化できるような図（ラーニングマップ）に整理し、アカデミック・ライティング指導に活かしていった。

イ) アカデミック・ライティング指導の計画と実践

1年次は各教科等における「言語能力」の育成方法を基に、そこで用いる様々なツールと、思考スキルとを組み合わせた上でのアカデミック・ライティング指導を発達の段階に応じて計画し、実践した。さらに2年次は、本校における言語能力の捉えとめざす姿、育成方法について整理し、指導の方策を明確化した。また、発達段階に応じた言語能力の到達度目標を設定し、各学年におけるアカデミック・ライティング指導を計画し、実践した。その指導にあたっては、①「課題の設定」②「情報の収集」③「整理・分析」④「まとめ・表現」という探究的な学習過程を経ることができるよう生活科及び総合的な学習の時間を中心に行った。本研究2年次は、各学年の成果物の発表を下学年に行い、相手意識をもつことで④「まとめ・表現」段階における推敲に関する言語能力についても育成を図った。

ウ) 「言語能力」育成状況の多面的測定

児童の「言語能力」の向上を測るための取組を複数取り入れた。1つ目は、学力の到達度を測る標準学力検査CRT/目標基準準拠検査であり、2つ目はNINO認知能力検査であり、3つ目が、読書力診断検査である(図書文化社)。いずれも、量的なデータが得られるものである。さらに、「言語能力」が、提示/解答方法によって影響するかどうかを測るために、同一問題を異なる提示/解答方法(ICT利活用での提示/解答群・紙面での問題提示/解答群・ICTでの問題提示/紙面解答群)による独自の調査を行った。その際、特に「情報処理能力」に主眼を置き、この調査を経る中で、紙面の有無や解答方法の違いによる影響を測った。

また、アカデミック・ライティングの成果を評価するための指標となる問題を作成する。本校ではアカデミック・ライティングで指導可能な言語能力として以下の4点を設定した。

- ①情報を読み取る力
- ②情報を比較し、読み取る力
- ③読み取った情報を基に自分の意見を表現する力
- ④仮説を立てる力

これら进行评估する際、目的や必要に応じて資料を選択し、考えを記述することができているかという視点で国語、算数、社会、理科の4教科に関する問題を作成(言語能力に関する検査①)することに加え、教科の枠を取り払い、言語能力を総合的に見ることができる問題を作成(言語能力に関する検査②)して実施することにより、年間の指導を経ての変化を調査した。なお、2年次となる今回は1年次との変化も分析した。

エ) 「言語能力」育成のための指導方法の改善と発信

以上のような検討を経て得られた知見を、授業改善に反映させていった。そしてどのように取り入れ、実践したのかという点を、読解力などの言語能力等育成のための取組という観点でまとめ、発信した。さらにそのフィードバックを得る中で、更なる改善を図った。

2. 効果検証内容・結果

(1) 効果検証のための指標

No.	検証のための指標	実施主体	具体的な検証内容
1	標準学力検査CRT /目標基準準拠検査	株式会社 図書文化社	基本的な学力の到達状況を測定し、全国平均との比較を行う。
2	NINO認知能力検査	株式会社 図書文化社	児童の認知能力についての検査結果を研究前後で比較し、研究を検証する。
3	読書力診断検査	株式会社 図書文化社	児童の読書力についての検査結果を研究前後で比較し、研究を検証する。
4	言語能力に関する検査 ①②	佐賀大学教育学部 附属小学校	①同一問題で提示/解答方法が異なる検査を設定する。「言語能力」と共に、

			紙面の有無や解答方法の違いによる影響を測る。②アカデミック・ライティングの指導に関する検査結果を研究前後で比較し、研究を検証する。
5	保護者へのアンケート調査の結果	佐賀大学教育学部 附属小学校	児童の言語能力育成及びアカデミック・ライティングの指導に関する状況を検証する。
6	児童への聞き取り調査	佐賀大学教育学部 附属小学校	言語能力育成及びアカデミック・ライティングの指導に関する状況を検証する。
7	公立学校教員へのアンケート調査	佐賀大学教育学部 附属小学校	児童の言語能力育成及びアカデミック・ライティングの指導に関する状況を検証する。

(2) 指標に関するデータの取得方法（時期、回数等）

	検証のための指標	データ取得の時期、回数等
1	標準学力検査CRT ／目標基準準拠検査	令和4年1月、令和5年1月にそれぞれ1回ずつ、全校児童に対して学力検査を実施。
2	N I N O 認知能力検査	令和3年6月（研究開始前）と令和4年11月（研究開始1年経過後）とで実施し、認知能力として測定。
3	読書力診断検査	令和3年6月（研究開始前）と令和4年11月（研究開始1年経過後）とで実施し、読書力として測定。
4	言語能力に関する検査 ①②	令和3年6月（研究開始前）と令和4年2月、令和4年5月、令和4年11月と合計4回で実施し、言語能力に関する変化を観察。
5	保護者へのアンケート調査の結果	令和4年12月までの間に生活科及び総合的な学習の時間で得られた児童の成果物についての保護者アンケートを実施する。または、授業参観後にアンケートを実施。
6	児童への聞き取り調査の内容	令和4年1月及び令和4年12月・1月の2回、児童に対してアンケートを実施。
7	公立学校教員へのアンケート調査の結果	令和3年11月、令和4年8月、及び令和4年11月の3回、教員に対してアンケートを実施。

(3) 検証の際に比較の対象とする学校等

取組実施校	比較対象校	比較対象とした理由
佐賀大学教育学部 附属小学校 令和4年度児童	佐賀大学教育学部 附属小学校 令和3年度児童	多面的測定において、昨年度（本研究1年次）の結果と今年度（本研究2年次）の結果を比較検証した。本研究の効果検証を明確に測るためである。
計 1校	計 1校	

3. 考察（指標に関するデータの分析結果、本調査研究における取組の有効性等）

本研究では、学力向上のための基盤となる読解力などの言語能力等を育成することを目的として、実践を行ってきた。その内容は大きく次の2点である。

- (1) 言語能力の明確化及び育成
- (2) アカデミック・ライティングの指導の計画と実践

(1) 言語能力の明確化及び育成

ア 各教科等における言語能力の育成方法の明確化（1年次）

- a 各教科等における言語能力の整理
- b aを細分化し、発達の段階に応じた言語能力として整理
- c 言語能力の育成方法とその詳細の整理
- d 実践と考察

1年次、各教科等における言語能力の整理を行った。発達の段階に応じた言語能力とその育成方法を明確にし、各教科等がそれぞれの発達の段階において、どのような方法で言語能力を育んできたかを共有できるようにするためである。

1年次の成果としては、各教科等における言語能力を整理したことで、各教科等において育成を得意としている言語能力、教科特有の言語能力、各教科等に共通している言語能力など、言語能力を俯瞰して捉える土台形成ができた。また、そのことで教科横断的な視点をもつことにつながった。

課題としては、手立てとして教師の裁量によるものが大きかったこと、各教科等で育成してきた言語能力と教科の枠組みを超えた言語能力との関連性が挙げられた。

イ 「言語能力」の捉え・めざす姿・育成方法・到達度目標の明確化（2年次）

- a 本校における「言語能力」の捉え・めざす姿・育成方法の整理
- b 各学年の言語能力到達度目標の設定
- c 実践と考察

2年次では、1年次の成果と課題をうけて、「言語能力」を「読解力」「創造的思考」「他者とのコミュニケーション」の3つの側面から捉え、整理を行った。1年次では指導可能な言語能力として4点を設定していたが、各教科等でそれぞれ整理したため、全体としての捉えが十分とは言えず教員間の共通認識が必要であった。そこで2年次は、3つの側面から言語能力を捉え、めざす姿、育成方法、各学年の到達度目標を具体的に整理した。

< 1年次 >

- ・ 情報を読み取る力
- ・ 情報を比較し、読み取る力
- ・ 読み取った情報を基に自分の意見を表現する力
- ・ 仮説を立てる力

< 2年次 >

- ・ 読解力の側面
- ・ 創造的思考の側面
- ・ 他者とのコミュニケーションの側面

図画工作科では、次の到達度目標を活用し指導にあたっている。

読解力の側面	創造的思考の側面	他者とのコミュニケーションの側面
身の回りにある事物を理解し、自分事として事物を捉え、正確に把握し、自分なりの方法で表現することができる。	アイデアや概念を説明することができる。 説明する・認識する・意識する	意図を何らかの手段で伝達しようとする ことができる。(非言語手段)

本題材は、紙粘土を主材料にし、自分の楽しかった思い出を立体に表す題材である。無数にある思い出の中から図画工作科で表現するのに適した思い出を選択する（下線部㉑）ために、思考ツールのピラミッドチャートを用いる。活動中は、どのような形や色にしたら自分の思いが表現できるのかを児童が意識し、自分の表現のよさに気付くことができるように（下線部㉒）、タブレット端末を活用したデジタルポートフォリオの作成と、それを通じた支援を行う。また、自分の作品への思いを友達に語ったり、友達の作品への思いを聞いたりする（下線部㉓）ことができるように、児童同士の対話が自然と生まれるような学習環境の設定を行う。

成果として、図画工作科のような非言語能力が表れやすい学習において、到達度目標に応じた手立てを講じることで、造形的な見方・考え方を働かせ、互いの思いをアカデミック・ライティングに沿って伝え合う姿が見られた。

2年次はその他の各教科等においても到達度目標を活用・実践し、児童の変容が見られた。その結果、多面的測定における国語科・社会科・算数科・理科の言語能力に関わる問題①では、3つの側面において一定の効果が挙げられている。以下、4教科の考察の一部を示す。

国語科	<p>「情報を読み取る力」に関する問題の方が、「情報を比較し読み取る力」に関わる問題よりも、年度内の伸び幅が大きい。情報を読み取る「読解力」は指導の効果があつたと考えられる。</p> <p>「読み取った情報を基に自分の考えを表現する力」に関わる問題では、令和4年度をまたいで年々上がり続けている。「創造的思考の側面」及び「他者とのコミュニケーションの側面」におけるアカデミック・ライティング指導の効果であると伺える。本校国語部では、この2年間も、文章内容を理解するだけにとどまらず、国語科としての方略（説明の工夫）の習得・活用に焦点化した授業を行ってきた。これらの取組みも言語能力の育成に寄与したと考えられる。</p>
社会科	<p>「読解力の側面」及び「他者とのコミュニケーションの側面」についてR4年6月と11月の正答率の変容から考察する。高学年において変化が大きく、「6年間①」のICT／紙でわずかに減少しているが、その他の問題では解答方法に関わらずどの学年でも増加していた。</p> <p>「創造的思考力の側面」及び「他者とのコミュニケーションの側面」について、解答方法に関わらずどの学年においても増加する結果となった。R4年の第6学年児童は、複数の資料を比較したり関連付けたりしながら情報を読み取り、根拠を示しながら考えを交流し合う活動を積み重ねてきている。また、単元の終末には学習してきたことをもとに、関係機関の専門家に自分の考えを提案する活動も行っている。このような取組みも成果の一因であると考えられる。</p>
算数科	<p>「読解力の側面」については、表1をみると、低学年から中学年において変化が大きい。2年から3年において、ICT機器を使用した場合に、正答率が下がることもあるが、3年で安定して上がる傾向となっている。中学年で安定し、高学年では高い数値での推移となっており、中学における読解力の指導の重要性が伺える。</p> <p>「創造的思考力の側面」について、表2をみると、読解力の側面同様、低学年から中学年にかけて安定して正答率が上がる傾向がみられる。さらに、高学年で上がる傾向があることから、読解力をベースに創造的思考力が高まる関係性が考えられる。この2か年、本校算数部では、ICT機器も含めて多様な表現を自己選択する場面を設けており効果が伺える。</p>
理科	<p>「読解力の側面」について、2年次（R4年11月）実施の調査結果では、解答方法に関わらずどの学年においても増加する結果となった。これは、アカデミック・ライティング指導に関わって、理科の学習において、問題を見いだす場面での言語活動を意識して取り組んできた成果の一端であると言える。</p> <p>「創造的思考の側面」及び「他者とのコミュニケーションの側面」について、同調査結果では、解答方法に関わらずどの学年においても増加する結果となった。問題解決の過程において、複数の実験結果などから読み取れることを、どのような手段を用いて他者に伝えるかを児童が考えて表現してきたことは、正に、理科としての「読解力」「創造的思考」「他者とのコミュニケーション」が複合的に関連付いた学びの成果につながったと言える。</p>

このような実践や多面的測定から、「言語能力」の捉え・めざす姿・育成方法・更には各学年の到達度目標を3つの側面から明確にしたことで、本校の全教員が「言語能力」について共通認識をもち、同じ尺度の下、各教科等の指導にあたることができたと言える。1・2年次をふまえると、各教科における「言語能力」育成として捉えるだけでなく、教科横断的な視点の明確化とそれを全教師が共通認識し、可視化できる指標があることが上記の成果に大きく影響したと考える。

(2) アカデミック・ライティングの指導の計画と実践

ア アカデミック・ライティングの定義付け・指導モデルの作成と計画・実践（1年次）

<ul style="list-style-type: none"> a アカデミック・ライティングの定義付け b アカデミック・ライティング指導モデルの作成 c アカデミック・ライティングの計画と実践 d 考察
--

1年次では、アカデミック・ライティングの定義付けと指導モデルを作成し、計画・実践を行った。各教科で育成してきた言語能力を関連付け、各教科等の枠組みを超えた言語能力の育成を図るために「鯨っ子学習」を設定した。この「鯨っ子学習」は、各教科等の学習を通して身に付けた言語能力を統合して発揮する場という位置付けである。アカデミック・ライティングの指導は国語科における「書くこと」領域とは異なるものであり、読解（input）した情報をどのような手順で表現（output）していくのかを指導し、各教科で育成してきた言語能力を、

より現実の文脈に沿って働かせることによって、更に教科横断的なものにしていくことをねらった。実践後に行った、「言語能力を統合して解決する問題①②」の検査においては、アカデミック・ライティングにおいて指導可能な言語能力として設定した項目においては一定の伸びが確認された。また、「鯨っ子学習」における保護者アンケートにおいても、児童の言語能力の向上に関する意見が多く見られていた。一方で、各教科等で育成してきた言語能力と教科の枠組みを超えた言語能力との関連性の明確化に課題があった。

イ ラーニングマップの検討と計画・実践（2年次）

- | | |
|---|----------------|
| a | ラーニングマップの検討 |
| b | ラーニングマップの活用と実践 |
| c | 考察 |

2年次では、1年次の成果と課題をうけて、「鯨っ子学習」の時間に、ラーニングマップを検討し、活用した。「ラーニングマップ」とは、各学年における教科等の学びと「鯨っ子学習」等で培われる資質・能力のつながりを明確にするために、各学年の年間指導計画を基に、各教科等でどのような資質・能力が活用できるのかを示したものである。

各学年の「鯨っ子学習」実践では、以下のような目的や成果が挙げられた。

第3学年	<p>本実践の目的 土台作りを行うための手立てとして、ラーニングマップを活用し、課題解決の過程をつかむことができるようにする。その際、ラーニングマップを活用しながら、第1・第2サイクルの課題を解決していく。そしてこの経験と学んだことをもとに、第3サイクルの鯨っ子学習に生かすことができるようにしていく。上記の手立てにより、児童が主体的に鯨っ子学習を進めることができるようにしていく。</p> <p>実践の成果 ラーニングマップを活用し、課題解決の過程が培われたことで、【創造的思考の側面】である、「情報・概念を新たな方法で使ってみる」土台作りができた。</p>	
第4学年	<p>実践の成果 ・学年グループで活動を行い、専門の教師の指導を受けたり同じグループの友達と共有したりすることで、いろいろな方法を使って情報を集めたり整理・分析をしたりすることができた。 ・児童はそれぞれの過程で、自分の課題や発見をすることができ、自己の学びにつながった。 ・「3年生へ伝える」という目的・相手意識をもって粘り強く取り組むことができていた。</p> <p>今後の展望 課題ストックノートやラーニングマップをいかに活用してより教科横断的な視点で取り組むことができるかを探り、教科横断的な学びの実現の方策を考えていく必要がある。今回先行的にルーブリック評価や終末の自己評価を実施してきたが、評価の効果的な在り方について探ることも必要である。</p>	
第5学年	<p>実践の成果 ・ラーニングマップに記録しながら、探究的に学ぶことで、各教科とのつながりが明確になった。 ・4年生にも伝わる発表ができ、アカデミック・ライティングの指導の効果が表れている。</p> <p>今後の展望 ・「資質能力デザイン」と個人研究での姿を関連付けた指導と評価の在り方を探る。</p>	
第6学年	<p>実践の目的 児童の変容を以下の実践を通して示していく。</p> <table border="1" style="margin-left: 20px;"> <tr> <td>個人研究において記述と推敲を意識するために、自分の学びを可視化する「ラーニングマップ」を活用した鯨っ子学習を行う。</td> </tr> </table> <p>実践の成果 ・自らの学びの足跡をラーニングマップに追記することで、深いサイクルを生み出していた。 ・ラーニングマップを活用することで、研究全体の流れをクラス全体で共有することができ、互いにアドバイスしやすい状況をつくり出すことができた。</p>	個人研究において記述と推敲を意識するために、自分の学びを可視化する「ラーニングマップ」を活用した鯨っ子学習を行う。
個人研究において記述と推敲を意識するために、自分の学びを可視化する「ラーニングマップ」を活用した鯨っ子学習を行う。		

さらに、小中連携を見据えた実践として、以下のような成果が挙げられた。

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ・全学年において、教師は教科横断的な視点をもって教科等の指導に取り組むことができた。児童も教科等の学びと「鯨っ子学習」をつなげて考えることができた。 ・教師は「鯨っ子学習」のそれぞれの場面で、視点をもって児童の活動や内容について指導を行うことができた。 ・児童は、上学年の研究発表を聞いたり、ラーニングマップで俯瞰的に学びを捉えたりすることで、次の「鯨っ子学習」の見通しをもつことができた。 |
|---|

このような実践から、ラーニングマップを活用したことで課題解決の過程が可視化され、「鯨っ子学習」の見通しをもって学ぶことができたと言える。また、個人の学びをラーニングマップに追記したり俯瞰して学びを捉えたりすることで、深いサイクルを生み出すことができた。1・2年次をふまえると、指導モデルやラーニングマップを活用し、課題解決の過程や学びの足跡を可視化することで、教師も児童も各教科等の学びのつながりを共有できたことが上記の成果に大きく影響したと考える。

その他多面的測定、保護者アンケートからの成果を示す。

言語能力を統合して解決する問題②調査の結果及び考察では、言語能力の育成のためには、各教科で学んだことを総合的に活用しながら行う鯨っ子学習が効果的であると言える。特に「仮説を立てる力」については高まりが顕著であり、これまでの実践の効果が伺える。

CRT、NINO、読書力調査に関わる分析では、中位層に位置していた児童の伸びが顕著にみられ、「読解力」「創造的思考力」「他者とのコミュニケーション」の3観点に関わる問題においても、アカデミック・ライティング指導が一定の成果を上げていることが分かる。

保護者アンケートでは、多くの回答を頂いた中に、「個人研究であること」や「研究テーマが児童主体」であることに対する肯定的な意見があった。また、1人1台端末を活用して成果物をまとめることについても、好意的な回答が得られた。

4. 課題

今後の課題としては、以下のことが挙げられる。

- | | |
|---|----------------------------|
| a | アカデミック・ライティング指導の意図的・計画的な継続 |
| b | アカデミック・ライティング指導の改善と実践 |
| c | 評価の在り方 |

本研究の中心に据えた「鯨っ子学習」は全学年で実施しており、児童にとって個人探究は続くことから、今後もアカデミック・ライティング指導を意図的・計画的に継続することが必要である。また、本研究はICT活用により、効果的な手立てと指導を実現することができた。更なる教育的データの蓄積・改善を行い、効果的な評価の在り方を探り、児童の学力向上の基盤づくりに向けた実践を積み重ねていくことが課題である。

5. 今年度の研究経過

月	内容
令和4年4月	保護者への説明
令和4年5月	文部科学省主催による学力向上推進協議会（全体会） 「言語能力」を統合して解決する問題の実施
令和4年6月	本校における言語能力の捉えやめざす姿、育成方法の明確化 各学年の到達度目標の作成
令和4年7月	校内学力向上推進協議会（第4回）開催 教師対象アンケート（第2回）（授業力向上フェスタアンケートにて）
令和4年8月	アカデミック・ライティング指導の計画
令和4年9月	アカデミック・ライティング指導の実施・改善・検討
令和4年11月	実地調査 公開授業：算数科・総合 各研究協議 研究発表会の実施 教師対象アンケート（第3回）（研究アンケートにて） NINO 認知能力検査／読書力診断検査の実施 「言語能力」を統合して解決する問題の実施 校内学力向上推進協議会（第5回）開催
令和4年12月	保護者へのアンケート（第6・5・4学年対象）

	実践・多面的測定結果の分析
令和5年1月	児童への聞き取り調査 CRテストの実施 学力向上推進協議会（第6回）開催
令和5年2月	事業成果報告会（オンライン） 本研究報告書の送付（全附・佐賀県教育機関・佐賀県内小学校） 学力向上推進協議会（第7回）開催
令和5年3月	研究報告

6. 研究関係者

(1) 学力向上推進協議会構成メンバー

令和3年度（1年次）

所属	氏名
佐賀大学アドミッションセンター長	西郡 大
佐賀大学教育学部 準教授	井邑 智哉
佐賀大学教育学部 準教授	竜田 徹
佐賀県教育委員会	牟田 清敬
佐賀大学教育学部附属小学校評議員	村岡 智彦
佐賀大学教育学部附属小学校育友会 副会長	古川 誠一
佐賀大学教育学部 統括長	今井 治人
佐賀大学教育学部附属小学校 校長	豆田 幸彦
佐賀大学教育学部附属小学校 教頭	岩崎 稔敦
佐賀大学教育学部附属小学校 教務	福田 修
佐賀大学教育学部附属小学校 研究主任	森田 祐介
佐賀大学教育学部附属小学校 事業担当者	廣瀬 圭吾

令和4年度（2年次）

所属	氏名
佐賀大学アドミッションセンター長	西郡 大
佐賀大学教育学部 準教授	井邑 智哉
佐賀大学教育学部 準教授	竜田 徹
佐賀県教育委員会	牟田 清敬
佐賀大学教育学部附属小学校評議員	村岡 智彦
佐賀大学教育学部附属小学校育友会 会長	古川 誠一
佐賀大学教育学部 統括長	今井 治人
佐賀大学教育学部附属小学校 校長	岩崎 稔敦
佐賀大学教育学部附属小学校 教頭	荒川 尚
佐賀大学教育学部附属小学校 教務	中尾 通孝
佐賀大学教育学部附属小学校 研究主任	白井 雄大
佐賀大学教育学部附属小学校 事業担当者	江頭 範朗
佐賀大学教育学部附属小学校 事業担当者	峰 福太郎